

Ⅲ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入せよ。

古代・中世のヨーロッパ人は地中海を挟んだアフリカ北部の情報しか得られず、アフリカをいわゆる「暗黒大陸」と長い間見なしてきた。だがアフリカの内部では民族移動や河川交易を通じた活発な交流があり、独自の文化がはぐくまれた。

現在のサハラ砂漠の領域は1万2000年程前から湿潤気候となり、草原やサバンナが広がる「緑のサハラ」が出現し、牛を使った農耕が広がった。しかし紀元前2500年以降にはこの地域が再び乾燥化し、現在の砂漠へと変化した。オアシス都市を経由し砂漠を旅するサハラ交易は紀元前6世紀頃から活発化し、まずフェニキア人が、次にローマ人が参入した。サハラ交易の主な交易品は、サハラ砂漠で産出される板状の岩塩と、ニジェール川で産出される 、および奴隷であった。東西に延びるサハラ砂漠南部の草原地帯は「スーダン」と呼ばれ、その地名はアラビア語の「黒い人」に由来するとされる。

一方、肥沃なナイル川流域では古王国時代から諸王朝が興隆した。このうち、ヌビア人が前10世紀に建国した 王国は、前8世紀にエジプト南部から北上し、ナイル川沿いのテーベに都を置いた。前7世紀以降の後期 王国はエジプト南部の中継交易地である を首都としたことから 王国とも呼称され、前5世紀頃にこの地に製鉄技術が伝わった。製鉄の繁栄を示す遺跡が発見されてから、 は後世に「アフリカのバーミンガム」と呼ばれた。この王国は、アラビア半島からエチオピア高原に移住してきた人々が建国した 王国により、4世紀半ばに滅ぼされた。

7世紀に西アフリカ・サハラ砂漠南西部に興った 王国はサハラ交易で繁栄した。さらにアフリカ北部のイスラーム化が進行すると、アラブ商人、トゥアレグ商人がサハラ交易を活発化させ、 王国に積極的に出かけてこの地にイスラームをも伝えた。11世紀にはこの 王国がサハラ以南で最初のイスラーム国家となった。しかし同王国は11世紀後半にアフリカ北部から侵攻した 朝に攻撃され、衰退した。その後13世紀に台頭したマリ王国では、ニジェール川流域の都市 がサハラ交易とメッカ巡礼の拠点として栄えた。マリ王国最盛期の王 はムスリムであり、1324年、1万人近い従者と40頭のロバに背負わせた

[A] とともにメッカ巡礼を行なったと言われている。しかし15世紀にはソンニ=アリ王が統治する [I] 王国がマリ王国の支配を脱し、ニジェール川大湾曲地域の盟主になった。ソンニ=アリはムスリムを弾圧したが、クーデターで彼から政権を奪ったアスキア=ムハンマドは熱心なムスリムであり、メッカでカリフの称号を授かった。[I] 王国はその後サハラ砂漠の岩塩鉱山の主導権を巡って [J] のサアド朝と対立し、1591年にサアド朝軍に敗北して滅亡した。

ヨーロッパとサハラ以南のアフリカが本格的に接触するのは、ポルトガルが探検を開始した15世紀以降である。ポルトガル王ジョアン1世の子 [K] はアフリカ西岸部の探検を奨励し、「航海王子」と呼ばれた。イベリア半島でキリスト教徒がイスラーム勢力からの領土奪回を目指したレコンキスタ（国土回復運動）は1492年に完了したが、ポルトガルは1249年にいち早くこれを成し遂げたため、船乗りたちが大西洋に乗り出していた。アフリカの [A] とカナリア諸島に関心を持つ [K] は探検を推進し、1415年にはアフリカ西北端の [L] を攻略して西アフリカ探検事業の先鞭をつけた。[K] の事業を引き継いだジョアン2世は、インドや東南アジア原産の胡椒やシナモン、クローブなどを直接取引するためにインド航路開拓を目指し、1487年にバルトロメウ=ディアスを派遣した。翌年、ディアスはアフリカ南端の [M] に上陸し、インド航路開拓の先駆けとなった。またマデイラ諸島を皮切りに、16世紀からブラジルでサトウキビ=プランテーションを行なったポルトガルはアフリカ西海岸の黒人奴隷を売買するようになった。このためポルトガルの首都 [N] では、16世紀半ばに人口の約1割が黒人奴隷だったと言われる。

ポルトガルはアヴィス朝の断絶で1580年にスペインと同君連合になったが、その前後にスペインとネーデルラント（オランダ）、フランス、イギリスの間で頻繁に戦争が起こり、スペイン・ポルトガルの海外領土も攻撃にさらされた。これら西ヨーロッパ諸国はポルトガル経由の胡椒販売に不満を持ち、インド航路に進出して密貿易を行なおうとした。オランダ、フランス、イギリスの船はアフリカ、アジアにおける「ポルトガル海上帝国」の拠点を軍事的に奪取することをせず、アフリカ西海岸に進出して胡椒、[A]、奴隷を取引した。13～18世紀に現在のナイジェリア西部に存在した [O] 王国は、奴隷、胡椒、象牙をヨーロッパ商人の武器な